



私たちは、自分の生活習慣で自ずとやっていて、そこに知識としてあとから入っていく方が効果的だろうと思っただけです。そういう目的で、今回、さつさんからの融資を活用したのが、市内北区にある大宮保育園に設置した二〇畝の太陽光パネルだった。

「この保育園は昭和四十八年に開設して、今年で三十三年経ちます。二十二年、若い職員が増えたりと、三十年間使つていかなかったりとか、水道代、電気代がかさむことも多くて、これからどう経営していくべきかと思つていたので」

そう言うのは、この園の園長、北尾青子先生。しかし実際に園内を見回してみると……。

「使つていない電気がついている。お外で遊んでいるときでも、電気をつけっぱなし。夏ならエアコンをつけたままでプールで遊んでいたんです」

もったいないと思ひ、黙つて消しまわる日々が続いたが、毎日仕事に追われる職員には、なかなか伝わりにくかつたと振り返る。「もったいない」という感覚がない世代に、どうやって伝えていくかというのが、北尾先生のもうひとつの悩みとなった。もちろん地球温暖化という大きな問題もあるが、目の前にある無駄な経費を削減という切羽詰まった問題として対処する必要に迫られたとき、きょうとグリーンファンドと出合う。

「環境問題を考えてみませんか」という話をいただいたときに、まさしくそれだと思ひました。いま私たちが若い職員にも

つたないと言つてもなかなか通じない。だけど、太陽光発電。おひさま発電所。づくりをきつかけに、環境学習すれば彼らにも、そして子供たちにも伝わると思ひました」

北尾先生の目論見は、当たった。以来、実際に園の屋上に太陽光パネルを設置するまで、職員はもちろん、園児だけでなく保護者までもが、みんな地球の状況を学び考へた。そしていまの自分たちができることを、小さなことからはじめていったという。

このプロジェクトは、パネルを設置したから終わりではない。ひとつ気づけば、裾野は広がる。園児たちの夏祭りやバザーなどで使う食器の使い捨てを止め、洗つて何度も使えるリターナブルに変えた。それは園からのお願ひではなく、職員や保護者から自発的に生まれたアイディアだった。小さな積み重ねが、広がりを持ちはじめた。

「普段保育の中で取り組んでいることが、各家庭に浸透して、いく。お父さんと一緒にお風呂に入つて、シャワーの水がもったいないと子供が水を止めたとか、つけっぱなしの電気を消したとか、実際に保護者からお聞きするんですよ」

これは、大人への意識づけにつながる。子供に注意したら悪さしないわけにはいかないからだ。

「三つ子の魂百まで」という言葉がある。小さいころの性質は年を取つても変わらないという意味だ。ここで育まれた習慣を身につけた子どもがどんどん増えれば、未来は明るいかもしれない。

NPO法人 きょうとグリーンファンド  
URL: www.h3.dion.ne.jp/kyoto-gf/

融資額/350万円 返済プラン/2006年1月31日一括返済  
持続可能な社会の実現を目指し、幅広い市民の参加を呼びかけながら自然エネルギーの地域への普及、省エネルギーの促進に関する事業を進めてきた「きょうとグリーンファンド」。今回は、京都市北区にある大宮保育園の屋上に10.8kWの太陽光発電設備を設置、市民参加方式での太陽光発電設備「おひさま発電所」設置を行うこの事業は、NEDO（独立行政法人新エネルギー・産業技術総合開発機構）の平成17年度「地域新エネルギー導入促進事業」に採択された。今回は、補助金交付までのつなぎ資金として融資。

地域にアピル！  
大宮保育園の太陽光パネルのポイントは外からも見えること。四つ角にある立地条件から、信符寺のクルマからは、パネルの裏に掛かれた手書き文字が見える。

